

夢追い人列伝

その六 「山口教員団伝」 (上)

初めに

令和2年、地域リーグに属するバスケットチーム「山口ペイトリオッツ」が産声を上げた。本年（令和3年）4月にB3リーグ昇格を遂げた県内トップチームであり、その源流をたどれば学校の教員で構成される「山口教員団（男子）」（以下「教員団」）に行き当たる。教員団は、発足当初から実業団やクラブチームを凌駕する技倆を持って県下に名を馳せるとともに、優秀な指導者や審判員、中・高体連等におけるリーダーを輩出してきた。県バスケット協会の歴代理事長（現専務理事）はそのほぼ半数が教員団経験者で、「人財」の宝庫として教員団は県バスケット界を牽引して来たと言って過言ではない。

一方、平成19年刊行の県バスケット協会60年史『夢を追う』には、教員団についての記載がほとんどなく、第1部「概観編」に断片的に登場するにとどまっている。同書の第3部「各連盟紹介編」は、実業団連盟やクラブ連盟等の沿革、歴史を記述したものだが、連盟組織不在の教員団については記載そのものがない。こうした不備は、出自やチーム編成の独特さゆえその変遷を記念誌の枠内にうまく収めきれなかったという事情も関係しているだろう。しかし、教員団が県バスケット界に果たしてきた功績を振り返ると、その歩みを記録し後世に残すことの意義は大きい。

当委員会に寄せられた意見も踏まえ、この度、シリーズの一環として「山口教員団」を取り上げることとした。もともと本列伝は、先覚者たる「ひと」を浮き彫りにすることに主眼を置いたものだが、今回は例外的に「チーム」に焦点を当て県バスケット界の歴史を照らし出そうと試みたものである。その際、分量を勘案して上・下の二部構成とした。「上編」では、発足の経緯から山田隆道第4代監督までの紀伝を紹介する。

なお、文中の氏名は一部敬称略・順不同であることを前もってお断りしておく。

山口教員団 （やまぐちきょういんだん） 男子 昭和35年結団 女子 昭和55年結団／平成2年活動中止 平成25年 国民体育大会準優勝／成年男子 （山口教員団中心） 平成28年 全日本教員大会優勝／教員男子 （山口教員団単独）	[男子]歴代監督 初代 白松寿人 S35 二代 安田望 S36～S37 三代 吉村旦 S38～S45 四代 山田隆道 S46～S51 以降は「下編」に記載
---	---

1 国体教員の部と教員大会

「国民体育大会（国体）」と「教員団」とは切っても切れない関係にある。

国体は、現在は「成年」及び「少年」という種別に分かれているが、かつては「一般」と「高校」の名称で区分され、その他に「教員」という種別が一時期設けられていた。そのため、各都道府県にはバレーやサッカーなど競技種目ごとの教員チームが存在していた。特別扱いとも言えるこの措置は、戦後の学校教育におけるクラブ活動がこの国の競技スポーツの再生と振興に大きな役割を担ってきた経緯と深く関わっている。

旧「全日本教員バスケットボール連盟」の公式サイトによれば、国体のバスケット競技に

教員の部が登場するのは昭和30年の神奈川県国体からで、昭和54年宮崎国体まで25年間続けられている。国体教員の部は男子だけであった。

一方、教員チームには自前の全国大会があった。全日本教員バスケットボール選手権大会がそれであり、国体教員の部設置から7年後の昭和37年に開設されている。山口県チームは昭和39年の第3回八戸大会から参加している。

部活動でチームを指導する教員の中には、プレイヤーとして二足の草鞋を履く者も少なくなかったし、国体の教員団の部での活躍も期待されていたが、昭和37年に長野県で第1回が開催された全日本教員選手権大会の創設は、そうした教職員にとってバスケットボールを追求する新たな場として意義深いものになった。

—『夢を追う』『草創期概説』から—

教員大会の歴史をひもとくと、昭和46年には女子の部も始まり、また、昭和49年から国体のリハーサル大会に位置づけられ、国体開催地で前年に開く慣例となった。したがって、平成22年の第48回教員大会は、山口国体が開かれる防府市と下松市が会場だった。実は防府市では、まだリハーサル大会でなかった昭和45年にも第8回大会が開催されている。そして、この年に設立された全日本教員連盟は、日本実業団連盟、日本クラブ連盟、日本家庭婦人連盟とともにやがて「日本社会人連盟」に統合され、平成31年に発展的解消となった。更に、教員大会自体もその前年の平成30年茨城大会（男子第56回、女子第48回）をもって幕を閉じている。

本県教員団の国体出場は、昭和36年の秋田県を皮切りに宮崎国体まで都合5度あるが、初戦を突破したのは残念ながら山口国体だけだった。全日本教員大会には、第3回大会から最後の茨城大会まで平成18年能代大会を除く全大会に参加している。

この間、昭和55年には山口教員団女子チームが結成されて平成2年まで活動し、全国大会に11回出場した。なお、平成22年には加盟チームが一つながら「山口県教員連盟」が創設されたが、平成30年に、全国の動きに一年先行し実業団・クラブ・ママさんの各連盟とともに山口県社会人連盟に統合されている。

2 往時回想（一）

教員団の第一歩は昭和36年の秋田国体である。それまでも教職員で編成されたバスケットチームは県内にあったが、同好の士の集まりに近いものだったらしい。教員団発足当初の様子については、手がかりとなる記録類もほとんど見当たらず詳らかでない。そのため、山口国体時の監督・吉村旦氏（元県協会理事長・副会長）、主将を務めた吉規喜代二氏（元高体連専門委員長）、選手として活躍した山田隆道氏（元県協会審判長・現副会長）の手を患わずことになった。各氏とも、失念や勘違いがあるだろうが、と前置きされたこととお断りしておく。

吉村氏によれば、教員団は昭和35年頃に、徳山商工高校に勤めていた白松寿人氏の働きかけで結成された。したがって初代監督は白松氏とされるが、県内で公式戦があるわけではなく実際はチームの世話役、マネージャーといった立場だったようである。

白松氏が労を執った教員団設立の背景には山口国体がある。昭和30年に始まった国体教員の部であるが、チームのない山口県からは参加のしようがなく関心も低かった。それが、昭和38年の国体誘致が決まるとにわかに慌ただしくなる。国体開催県は全種目出場

が可能であり、それは参加点に直結する。賜杯争いに関わる出場チームの有無が重要な意味を持ってきたのである。

当時、バスケットの国体出場枠は中国地区から1県だけとなっていた。ただ、5年に1度、一般男女、高校男女、教員の部が順番で全都道府県から出場できる制度があった。秋田国体は教員の部がそれに該当しており、2年後の山口国体を視野に正式に立ち上げられた教員団の初陣となった。監督は、県教委事務局に転出した白松氏の後を受けて安田望氏が務めている。今日、米寿を間近に控える吉規氏は、1回戦は不戦勝で初戦となった2回戦では出ずっぱりだった、まだ若かった、と顔をほころばせた。当時の交通事情では秋田への行き帰りも大変な難行だったようである。

その頃の中国地区では島根県の教員チームが圧倒的な強さを誇り、なかなか中国地区予選を勝ち抜けず本国体への道は遠かった、と吉規氏は語る。したがって、翌37年の岡山国体には出場できていない。一方、教員大会は国体と違って予選はない。全都道府県の出場が可能で後には2チーム登録する県も出場するようになった。

当時のメンバーには、やがて山口県のバスケット界を支えていくことになる面々が名を連ねていた。その一人である山田隆道氏は、とりわけ大きな問題は練習会場と経費だったと語る。メンバーの勤務地は県下全域である上、移動手段なども今日とまるで違う。経費はほとんど自弁で経済的負担は一通りではない。それでも山口国体に向け、使命感に燃えて練習に励んだ。高体連機関誌『南風』には吉規氏の回顧談が「体育指導者としてのバスケットの思い出」と題して載せられている。

……昭和36年、初めて秋田国体に出ました。昔は国体に教員の部があり、中国予選を経て出場チームが決まっていたが、島根県が強く、どうしても予選を勝ち抜いて出場権を得ることができませんでした。当時のメンバーも全ては思い出せませんが、光高での恩師の門馬胤綱先生、猪股正先生、故山本勝美先生、吉村旦先生、安田望先生、松本正先生、岸本勲先生、藤村健治先生、藤山武先生、石田勝作先生、藤井貢治先生等々、他にもあるかも知れませんが抜けていたらお許し下さい。主力は山大、広大の卒業生だったと思います。私も若かったのでフル出場でした。ユニフォームもなく、松本先生が柳井高のユニフォームを借りて来られ、それを着て出場しました。

昭和38年、松本先生が国体事務局に入られたので私が主将を引き継ぎました。吉村監督のもと、若い山田隆道選手や浜村悦巳選手、岩崎克之助選手、小嶋賢選手、寺内保博選手、岩本徳郎選手、宮本和昌選手、中村恵三選手、佐浦綾男選手、寺田辰二選手等がいてチームも若返りました。光市や宇部市、山口市での合宿や大阪の日紡平野(当時実業団1位、現在のユニチカ)を宿に尾崎正敏監督の指導をうけ、日紡や大阪教員との試合を組んでもらいました。特にポジション取りの厳しさは勉強になりました。

山口国体は宇部市俵田体育館を中心に行われました。……国体選手には、武田薬品の絵堂明生選手(フォワード)と稗田稔選手(センター)を宇部女子高の講師扱いで補強しました。初戦は徳島県チームと対戦し一勝できました。2回戦は神奈川県だったと思いますが、残念ながら敗れてしまいました。44年の長崎国体を最後に教員団現役を吉村監督とともに引退しました。腰椎分離症もあり引き時ではなかったかと思います。

—参照:第20号(平成10年5月)「山口県バスケットボール史発掘」シリーズ—

文中にある宇部女子高校(現慶進高校)の計らいについては、同校の故・上野学監督や故・島本正義コーチのひとかたならぬ力添えがあったと聞き及んでいる。

3 往時回想（二）

発足初期の様子は故・松本正氏（元県協会副会長）の回想記にもうかがうことができる。吉規氏とはまた違ったアングルでの活写を、『南風』「発掘」シリーズ〔第19号（平成9年11月）～21号（10年11月）〕から一部割愛して紹介する。

精神力の関係で昔のことを思い出したので述べてみよう。山口教員団である。

最初は、門馬氏、猪股氏、山本氏、田中氏、松本などであったが、吉規先生が加わり白松寿人先生の骨折りで安田望氏がサッカーから加わり、安田氏を中心に教員団の再発足をしようとなった。県下に呼びかけ出来そうな人に集まってもらった。……



山田・吉規・松本3氏揃い踏み(山田隆道氏提供)

防府が中心で合宿の上また合宿、予算がないので物品は持ち寄り、県大会等を利用して出張を兼ねたこともあった。防商や防高が練習相手だが、にわか仕立てでとにかく苦労したものである。時には光の海岸でヨットの合宿所に入ったこともある。その時は藤井耿介先生や吉規先生の奥様にムスビを差し入れてもらい、大変おいしくいただいた。

現在のように交流村や青年の家があれば楽なもので、無から有を生み出す辛さは大変なものであった。しかし、誰一人文句を言う者はなかった。集まれば技術や審判の話で花が咲いたが、元気で若い者の集まり、いきおいマージャンや花札の出番となる。おかげで勝負根性が培われたような気がする。酒も、酔わないように上手に沢山飲む方法を勉強した。昭和36年の秋田国体に参加した時は宿舎がお寺さんで、試合が終わった晩の打ち上げは酒が2斗以上いったとか住職さんが話しておられた。それはすさまじかった。

また、日紡平野（現ユニチカ）の監督・尾崎氏の骨折りで、大阪に行き1週間合宿をしたことがある。わずかな強化費を大事に持つていくのだから旅館に泊まるようなことはしない。女子の寄宿舎に泊まり日紡の選手と行動が一緒であった。最初の一、二日はまだよかったが、女子とは言え日本一である。練習は楽しくなければならぬなどとはとんでもないこと、ほとんどの選手がへどを吐き、惨たんたる有様であった。

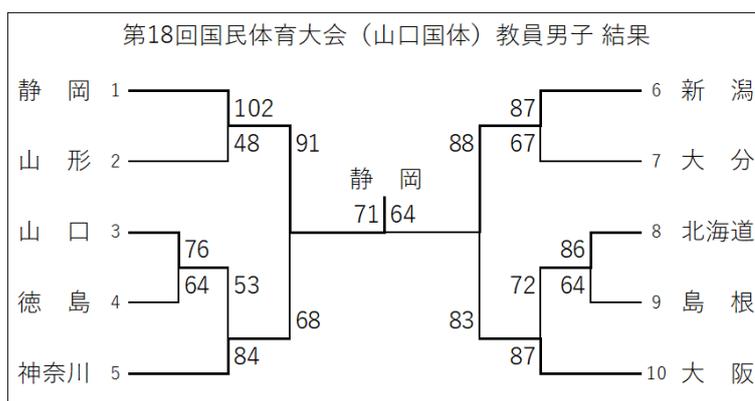
甲南大の選手とも一緒であったが、話にならない。とにかく井の中の蛙大海を知らずだった。ほんとうによい経験をしたものだと思う。移動は全て夜行列車、私や佐浦綾男先生はもっぱら宴会係だったが、皆それぞれ根は優しくて力持ちばかりの団員であった。以後、素質のある選手が育ち集まり今日の教員団に繋がったと思う。

—『私とバスケットボール（「水すましのたわごと」）』から—

吉村旦氏が日紡平野の尾崎監督と旧縁があったことから実現した大阪への強化遠征は、昭和37年8月のことのようなのである。「皆が音を上げた。ついていけたのは濱村氏くらいだった」と吉村氏が述懐するほどハードな合宿だったらしい。その中で「ディフェンスの強い当たりやスクリーンアウトの厳しさも学ぶことが出来た」とは吉規氏の言である。

4 山口国体（昭和38年）

かくして迎えた10月の山口国体は、1回戦徳島戦を76-64で逃げ切りひとまずベスト8入りを果たす。県教委へ異動になった安田望氏の後を継いで監督に就いた吉村氏は、特別な采配をした覚えはなく選手交代とタイムアウトに気を使っただけだと振り返る。忘れられないのは、ゲーム展開より選手同士が激突し対戦相手の



の宿に見舞いに行ったことの方だと苦笑いがこぼれた。2回戦は、濱村選手の長距離シュートがよく決まるも、山口53-84神奈川と彼我の力量差は埋めがたかった。もっとも、神奈川県とは秋田国体でも対戦しておりこの時には26-86の大差だったことを思えば、特に攻撃力は長足の進歩があったと言えよう。因みに当時の守備はもっぱらマンツーマン主体で、オフENSEのフォーメーションプレーなどはなかったらしい。山口国体のエントリーメンバーは次の通りである（敬称略・順不同）。

監督：	選手：吉敷喜代二 山田隆道 濱村悦巳 岩本徳郎 小嶋賢 寺内保博
吉村旦	岩崎克之助 宮本和昌 絵堂明生(武田薬品) 稗田稔(武田薬品)

松本正氏の記録によれば、その頃の教員団メンバーとして、これまで名前が挙げた方の他に、藤井耿介、中村豊継、山本恒夫、羽生恵三、佐藤理、藤村健治、山田紘（敬称略・順不同）などの各氏が加わっていた。

山口国体には後日譚が残る。絵堂、稗田両選手を送り出した武田薬品はこの年戦力が充実しており、全日本実業団選手権大会の出場権をほぼ手中にしていた。ところが国体がらみで肝心の2選手が出場できず、結局チームも出場権を手放すことになった。当時の武田薬品のチーム責任者であった故・中村幸男氏には何とか了承してもらったが、選手ともども後ろ髪を引かれる思いだったに違いない、とは吉村氏の回顧である。

国体を契機に誕生した教員団は、その後も県下のリーディングチームとして歩みを続ける。地域のクラブチームに加わることが難しい教員にとって、競技に打ち込める場がある意味は大きく、まず目指したのは国体出場であり教員大会上位入賞であった。

また、この頃の実業団チームでは協和発酵、帝人岩国などが中国大会などで活躍していたものの、クラブチームを含めて一般社会への競技の普及という面では必ずしも十分に機能しているとは言えなかった。教員団の存在は実業団に刺激を与えるとともに、学校の部活動を拠点とし地域のチームの競技力向上をもたらしたという点で、その存在意義は極めて大きかった。また、審判員の慢性的不足状態の中で教員団所属メンバーの積極的な審判活動は、大会運営に大きな支えとなった。

こうして、国体と教員大会を主軸に教員団は新陳代謝を繰り返しつつ県バスケット界に確固たる地歩を占めていく。後代には、勝ち上がれば全日本総合選手権大会への出場が可能になる道も整備され、活躍の場が広がっていくことになった。ただ、栄光への道は平坦ではなかった。吉規喜代二氏の回想にこうある。

昭和39年、日体大キャプテンを務めた桑原英雄が教員団に加わり、その後、田丸暁、佐藤太助、浜田和男、田中繁雄、枝折幸正等と、選手層も厚くなり若返りもしました。その頃でも教員大会で1回戦を勝って2回戦まで進めば良い方でした。

— 寄稿「初期の山口教員団について」から —

昭和45年、吉村監督と吉規氏は揃って教員団活動に終止符を打つ。監督を引き継いだのが、吉規氏からバトンを受け主将を務めていた山田隆道氏だった。山田氏は、勤務先の萩商業高校（現萩商工高校）で男女バスケット部の指導に明け暮れる傍ら、審判員として自身の活動はもとより後進の育成に余念ない多忙な身であったが、強く推されて教員団監督を引き受けた。ただ、全国のトップレベルにはまだ途半ばだった。



山口国体 教員団チーム（吉規喜代二氏提供）

5 チーム山口

山田氏によれば、氏の監督時代の選手は、佐藤太助・桑原英雄・田中繁雄・山田紘・浜田和男・寺田辰二・田丸暁・小林正・藤井房雄・徳吉真次・枝折幸正・吉田忠生・藤崎靖幸・野村守・山本和久・厚坊俊己・池口紳二・小西哲也・佐藤英雄・小池正夫（敬称略・順不同）などの各氏である。練習会場で苦勞する中、高水高校で合宿したこともある、亡くなった田丸氏には世話になった、と眼鏡ごしに遠くを見る目になった。

チームは、主将の桑原氏や佐藤太助・英雄の両佐藤氏、藤井氏などが主軸として牽引するが、5年振りの水戸国体では72－94で沖縄県に敗れる。「永遠に不滅です」が流行語となった昭和49年だった。教員大会でも、第5回大会では3回戦進出を果たしたものの、防府市で開催された第8回大会で1回戦を突破して以降は初戦の壁を越えることができず、待望の1勝は昭和57年の第20回大会まで待たなければならなかった。

山田氏も試合に臨むのに意図的な戦略を掲げていたわけではない。大学時代に磨かれた選手個々のテクニックは県内では群を抜く。個人の持ち味を生かした攻守と息の合ったゲーム運びを心掛けたが、一方、教員団の存在意義について思うところがあった。

試合に勝つことは確かに大切だが、学校の指導者が集まり切磋琢磨する中で、チームの指導方法や競技規則、技術講習、中央の動向など広範な情報を共有することはもっと重要だと考えたのである。ゲーム進行に欠かせない審判員の育成、大会の円滑な運営への全面的な協力などもメンバーに唱えた。練習や反省会等での情報交換は中・高の指導者のレベルアップをもたらし、成果がチームに還元されることで県全体の競技力の底上げに結びつく。それは、教員チームの特徴とも言える全県ネットワークを有効に機能させた有機的で総合的な取組みに他ならず、言わば今日の「チーム山口」のさきがけであった。こうして各メンバーは、教員団外の部顧問なども巻き込んで、技術普及や審判活動、大会運営等で中核的な役割を担い、その中で中・高チームのレベルアップを通して県全体の競技力の底上げが図られることになる。

昭和46年から51年までの山田監督時代は、飛躍を期してチームの体制整備を図りつつ、教員団が県協会における情宣機能や実働面において重要な位置を占めるようになって

いく時期でもあった。

以上、「上編」として教員団の誕生からほぼ20年間の歩みを俯瞰した。下の表は、この間の監督と試合結果をまとめたものである。

山口教員団（男子）の歩み（昭和35年～51年）

年	監督	教員大会			国体（教員男子の部）		
		回	場所	成績	回	場所	成績
1960 (S35)	白松寿人						
1961 (S36)	安田 望				16	秋田県	1回戦 山口26-86神奈川
1962 (S37)	↓	1	長野市		17		
1963 (S38)	吉村 旦	2	岐阜市		18	山口県 宇部市	1回戦 山口76-64徳島 準々決勝 山口53-84神奈川
1964 (S39)	↓	3	八戸市	1回戦 山口52-63群馬	19		
1965 (S40)	↓	4	中津市	1回戦 山口67-78福岡	20		
1966 (S41)	↓	5	熊谷市	1回戦 山口72-51栃木 2回戦 山口70-50京都 3回戦 山口45-110静岡	21		
1967 (S42)	↓	6	福井市	1回戦 山口53-68新潟	22		
1968 (S43)	↓	7	静岡市	1回戦 山口69-84秋田	23		
1969 (S44)	↓	中止			24	長崎県	1回戦 山口61-88新潟
1970 (S45)	↓	8	防府市	1回戦 山口75-58宮城 2回戦 山口67-99和歌山	25		
1971 (S46)	山田隆道	9	川内市	2回戦 山口63-89兵庫	26		
1972 (S47)	↓	10	木更津市	2回戦 山口63-88静岡	27		
1973 (S48)	↓	11	松江市	2回戦 山口66-73宮崎	28		
1974 (S49)	↓	12	津市	2回戦 山口76-104大阪	29	茨城県	1回戦 山口72-94沖縄
1975 (S50)	↓	13	唐津市	2回戦 山口83-112青森	30		
1976 (S51)	↓	14	八戸市	1回戦 山口67-72秋田	31		

続く「下編」では、この後の昭和末期から平成時代にかけて40年近くにわたる活動について述べる。教員女子チームの誕生やかねて念願だった全日本教員選手権大会優勝、国体準優勝の快挙などにもふれつつ、全国を舞台に繰り広げられたそのドラマの一部始終を紹介する予定である。

[文責：顕彰事業委員会]